

キリストに出会うとは

(ヨハネ12・20〜26)

一、ギリシア人が来た

ここに書かれている出来事は、主イエスが十字架にかかられた週のことです。過越の祭りが近づいていました。エルサレムには多くのユダヤ人と——その中にはユダヤ教への改宗者も含まれます——、ユダヤ教には改宗していないもののユダヤ教に心を開く「神を敬う人々」が集まっていました。20節のへさて、祭りで礼拝のために上って来た人々の中に、ギリシア人が何人かいた。《ギリシア人は、「神を敬う人々」であったと思われる。21節をご覧ください。《この人たちは、ガリラヤのベツサイダ出身のピリポのところに来て、「お願いします。イエスにお目にかかりたいのです」と頼んだ。》とあります。ピリポはガリラヤ湖畔の町ベツサイダの出身でギリシア語も話せたのでありましょう。「お願いします」は、原文には「主よ」と記されています。新改訳改訂第3版では「先生」と訳されています。「主よ」ということは、神に対してか、当時のローマ皇帝に対してしか使わないことばでした。おそらくギリシア人の「神を敬う人々」が、メシアともささやかれているイエスのうわさを聞き、ぜひお目にかかりたいと思い、

「主よ」と語ったのかと考えられます。

二、一粒の麦が死ななければ

23節をご覧ください。今すると、イエスは彼らに答えられた。「人の子が栄光を受ける時が来ました。》とあります。主イエスは、異邦人がメシアのところに来た出来事と「栄光を受ける時」とを関係づけられて語られました。人の子が栄光を受ける時とは、イエスが十字架にかかられることです。その御業により、すべての人に福音が及ぶようになりました。続いて、24節です。《まことに、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます。》とあります。こういう有名な聖句は一人歩きしてしまいがちですから、どういう意味合いで語られたかを今一度しっかり捉える必要があります。実は、その前の節の23節カギ括弧より、26節の終わりまでは、イエスが語られたことばとして記されています。だれに語られたのでしょうか。それは記されていません。主イエスがギリシア人たちに会ったかどうかも分かりません。ここを読む限りでは、会わなかったのではないのでしょうか。ですが、アンテレとピリポが、彼らの性格であり、持ち味からして、主イエスが語られたことばをギリシア人たちに伝えた可能性は十分に考えられます。い

ずれにしても、御自身のところに来たギリシア人を意識して語られたことばが、23節のカギ括弧から26節の終わりまでです。そのように受け止めますと、24節は、主イエスが十字架の道に進み、贖いの業を成し遂げることを意味していると言えます。イエスの贖いの業かなければ、異邦人の救いはもとより、弟子たちも罪の問題が解決されないのです。

三、キリストに出会う道

イエス・キリストに出会うためには、キリストが私たちの罪のために十字架で死なれたこと、葬られたこと、三日目によみがえられたこと、天に上げられたこと、聖霊が降られたと信じる必要があります。それは、キリストを信じて洗礼を受け、教会に連なった後も同じです。例えばある時から、罪人のために身代わりとして十字架にかかれたイエスさまのことを忘れてしまい、ひたすら「王の王、主の主」ばかりを強調してしまうなら、キリストに会えなくなってしまうのです。25節をご覧ください。《自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります。》と、主イエスは語られました。《自分のいのち》とは、生まれながらのいのちです。罪から救われていないいのちです。「私が、私が」と自己主張を

するいのちです。その、生まれながらのいのち、すなわち罪の問題が解決されていないいのちに固執しますと、ますます神のいのちから遠ざかって行きます。しかし、《この世で自分のいのちを憎む者は、それを保って永遠のいのちに至ります》と、主は語られました。ここで語られた《憎む》は、文字通りに「憎む」という意味です。主イエスについて行くとは、罪を憎むことです。すなわち、神に敵対する思いを憎むことです。そういう覚悟がないと神のいのちに至ることはないと教えられます。救いは恵みによります。キリストを信じるだけで救われます。ですが、恵みによって救われた者は、神の恵みによって地上的いのちを憎むことを求められていません。26節を見てまいります。《わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいるところ、わたしに仕える者もいることになり。わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。》と、おっしゃいました。イエスさまについて行くとは罪を憎むことです。続けて、《わたしに仕えるなら、父はその人を重んじてくださいます。》と主イエスはおっしゃいました。恵みによって、自分に与えられた十字架を退けず、それを背負って行くなら、そういう人を父が、すなわち神が重んじてくださる、ということです。